

# JAILA 第 14 回全国大会

## 研究発表および特別講演概要

会場 宮城教育大学

日程 2026 年 3 月 14 日 (土)

主催 日本国際教養学会 (JAILA)

後援 宮城教育大学



## 研究発表・午前の部 [231 教室]

### 発表①

#### 米軍基地を地域資源とした英語交流拠点の効果検証—岩国市英語交流センター「PLATABC」の事例—

永木 健一 山口県立大学大学院 学生

山口県岩国市では、英語教育と英語を核としたまちづくりを推進している。行政区域内に所在する米軍基地を地域資源として活用し、英語による交流を促進するための交流拠点「岩国市英語交流センター（PLAT ABC）」を令和 4 年 3 月に供用開始した。このような取り組みは国内では類例がなく、市民に対する異文化理解や国際意識、コミュニケーション力の向上にどのような意識変化が現れるかを明らかにすることを目的とする。発表者は、全国の米軍基地所在自治体における交流事業の現状を調査したうえで、令和 6 年 7 月から令和 7 年 5 月まで、PLAT ABC を利用する小学 5・6 年生、中学生、高校生、一般市民を対象にアンケート調査を実施した。また、日米協会岩国、PLATABC スタッフ、教職員、ALT 等を対象に半構造化面接を行い、意識変容の効果を検証した。本発表では、その集計結果と傾向について発表を行う。

### 発表②

#### アイヌ文化教育が媒介する英語教師のスタンス変容—言語観・倫理観・教育観の再編に着目したナラティブ分析—

坂本 南美 同志社大学

本研究は、日本の先住民族であるアイヌ民族の言語・文化を題材とした活動に参加した若手英語教師 A 氏への半構造化インタビューを対象に、教師が自己のスタンスを形成・再編していった様相をナラティブ分析により検討したものである。活動の取組では、アイヌ語や歴史的背景に触れる事前学習、アイヌ文化継承者の講話、国立アイヌ民族博物館での現地見学、その後の振り返り活動が連続的に実施され、学習者が新たな価値観に出会い考えを深める場が構成されていた。A 氏は当初「生徒に学ばせる」意図を持っていたが、実践を通じて自身も学びのプロセスに巻き込まれ、「教える者」から「共に学ぶ者」への視座の転換を語った。生徒の振り返りには主体的な理解の痕跡が見られ、先住民教育が教師の自己省察を促した可能性が示唆された。本研究は、アイヌを扱う学習が言語多様性と異文化への倫理意識に揺さぶりを生む点に着目し、英語教師教育の新たな視座を提示する。

### 発表③

#### 小学校における英語音声の慣れ親しみの諸相—児童のつぶやきの経年的変容に着目して—

和田 あずさ 宮城教育大学  
ナットチー 直子 能勢ささゆり学園

本発表では、小学校の外国語活動と外国語の学習活動を経て、児童がどのように英語音声に慣れ親しみを深めていくのかについての事例を紹介する。児童が音声のモデルを上手に模倣することができることと、児童自身が英語の音声の特徴や日本語との違いを知識として理解し発音できる技能を身に付けていることには隔たりがある。英語の音声に関する知識及び技能の習得に際してのこのような隔たりを埋める手がかりとして、本発表では「気づきの言語化」、すなわち *Languaging* に着目する。本発表では、英語の物語を声に出して読む活動やリズムを感得する言葉遊び・チャンツの活動を行う中で生起する児童の自由発話や児童間の対話のうち音声に関するつぶやきに焦点をあて、このつぶやきが音声の気づきや学びにどのように貢献し得るかについて検討するとともに、つぶやきの質と実際のパフォーマンスが第3学年から第6学年にかけてどのように変化していくかについて報告する。

## 研究発表・午前の部 [232 教室]

### 発表④

在日コリアン女性の子育てにおける選択と調整—再帰性と主体性の視点から

ウィックストラム 由有夏 武庫川女子大学

在日コリアン女性は、民族差別やジェンダー不平等など複数の抑圧構造が交差する社会的文脈に置かれている。本研究は、そのなかでも子育て期にある在日コリアン女性が、いかに日々の生活実践を組み立て、ときに主体的かつ戦略的に子育て・仕事・生活をめぐる選択や調整を行っているのかを明らかにする。18名の在日コリアン女性へのライフストーリー・インタビューをもとに、夫婦間のケア分担交渉、育児サポートの獲得と就労、学校選択をめぐる調整といった実践を検討する。インターセクショナルリティ (Collins) と再帰性 (Giddens) を分析枠組みに、女性たちが自身の子ども時代の経験を参照しつつ判断を見直し、利用可能な資源のもとで選択肢を模索し、ときに新たな選択肢を創出するプロセスに着目する。こうした実践から、女性たちが交差的な不平等のもとで主体性をどのように形成していくのかを明らかにする。

### 発表⑤

在日ベトナム人専門職の生活実態と課題：多文化共生社会実現に向けた基礎的研究

岩中 貴裕 山口県立大学  
林 炫情 山口県立大学

日本の学校教育は、日本文化を前提とした同化モデルに基づいており、外国人児童生徒や将来の多文化社会に対応する力を育成する仕組みは十分ではない。一方、社会では「技術・人文知識・国際業務」ビザを持つベトナム人専門職が増加し、地域の国際化に重要な役割を果たしているが、キャリア形成や社会統合に課題を抱えている。本研究は、こうした専門職の生活実態を明らかにし、来日前の期待と現実のギャップを分析することで、多文化共生社会の構築に資する教育的示唆を得ることを目的とする。調査結果は、地域社会における外国人受け入れの課題を可視化し、学校教育において異文化理解を基盤とした授業モデルを提案するための根拠となる。さらに、高校での出前授業やグローバル人材育成プログラムに還元し、若年層が文化的多様性を価値として捉える力を育成する。これにより、地域と教育現場の双方で多文化共生を担う人材育成を促進することを目指す。

#### 発表⑥

高等教育機関キャンパスの偏在に関する定量的分析—立地ジニ係数 (Locational Gini Coefficient) を用いた国際比較—

坂本 萌歌 関西学院大学大学院 学生

地方から都市部への人口移動が顕著な日本では、国際的にみても首都一極集中の度合いが依然として高い。人口移動の多くは大学進学時に生じるとされるが、その要因となり得る大学の偏在について、日本の状況を国際的に相対化した研究は管見の限り見当たらない。そこで本研究では、都市部への人口集中の一因として大学の立地構造に着目し、日本、アメリカ、フランス、ドイツを対象に国際比較を行い、日本の大学の偏在を位置づけることを目的とする。分析にあたっては、各国の高等教育機関キャンパス所在地を可視化し、立地ジニ係数を用いて行政区分ごとの集中度を設置形態別に算出、比較した。その結果、4か国に共通して私立機関の偏在が大きいことが確認された。一方、日本以外の国では私立機関の割合が低く、全体の偏在は抑えられていた。日本では高等教育を私立に頼ってきた背景から、都市部への私立大学集中が大学全体の偏在を高めている可能性が示唆される。

#### 研究発表・午前の部 [230 教室]

#### 発表⑦

Hosanna in the Heaviest: The Weight of Sound in T.S. Eliot's "The Hippopotamus"

Anna-Maria HATA The University of Tokyo

In “The Hippopotamus,” T. S. Eliot’s tight quatrains and four-beat lines draw the ear into a familiar, almost hymn-like ease, even as the poem’s satire unsettles the spiritual confidence such sonic order conventionally supports. This presentation reads the poem through an integrative framework, the Style of Sound, which treats sound not as decorative technique but as meaning-making style produced through embodied vocal elements: voice, breath, articulation, and rhythmic cadence, and more. Approaching the poem acoustically, phonetically, phonologically, and thematically, this study shows how prosodic features enlist the reader’s physicality as a condition of poetic understanding and clarifies the poem’s “double action.” Within this framework, I develop a close analysis of the poem’s weight and lift: a “heavy hippo” sense of bodily mass and institutional gravity, alongside hymn-like echoes and upward cadences that suggest a “hosanna” ascent. Grounded in stylistics, cognitive poetics, prosodic studies, and theological reflection, this study argues that sustained attention to prosodic texture and the reader’s physical response can reveal dimensions of meaning that remain largely inaccessible through silent or purely semantic reading.

#### 発表⑧

メディア・ディスコースと批判的談話分析（CDA）—福島県産のモモをめぐる BBC 報道を題材に—

久世 恭子 東洋大学

本発表では、2024 年に英国ロンドンの老舗百貨店ハロッズで販売された福島県産のモモをめぐる BBC 報道ディスコースの言語的特徴を、批判的談話分析を用いて明らかにする。ハロッズでは 2023 年から日本産果物の販売を行ってきたが、9 月に福島県産のモモが販売されると新聞や BBC など主要メディアで広く報道され、注目を集めた。モモ 1 個あたりの価格が高額であったことに加え、英国を始めとする欧州各国には福島産食品に対する放射能汚染への警戒感が根強く残っていたからである。本研究の分析方法としては、まず、テキスト・マイニングにより対象ディスコースの語彙の特徴を概観し、次に批判的談話分析（CDA）の「制約」の枠組みを用いて、このディスコースの形成に関わる言語的特徴を探る。その際には、質的データ分析ソフトウェア（QDAS）を利用してコーディングを行うことの意味についても検討する。

### 研究発表・午後の部 [231 教室]

#### 発表⑨

高校英語における AI の導入とクリエイティブ・ライティングークラス英詩創作における生徒の英文着想とメタ・リテラシーに関する質的研究—

漆畑 祐佳 静岡県立静岡商業高等学校

現代における AI の目覚ましい発展に伴い、高校の教育現場においても、AI との共生のための方策が模索され始めている。高校英語において、AI の導入を試みた。生徒が AI をどのように用いて、クラス英詩のためにどのような英文をどのように着想し創作したのかを、創作されたクラス英詩及び選択式及び自由記述式のアンケート調査を通して、質的に分析する。さらに、AI が使用された英文で創作されたクラス英詩と、AI が使用されなかった英文で創作されたクラス英詩との比較を通して、メタ・リタラシーの観点から、どのような意識を生徒が持つことができるのかについても分析する。このようにして、AI の導入により、今後の英語学習において何が可能となり、どのような動機づけがなされるのかについて考察し、最終的に、クラス英詩の比較検討がもたらすメタ・リタラシーの可能性についても探究する。

#### 発表⑩

教育政策借用の観点からみた日本の英語教育制度の国際比較

山本 五郎 法政大学

日本では初等・中等教育段階から英語教育が重視されてきたにもかかわらず、English Proficiency Index などの国際指標において英語運用能力は世界の中位から下位にとどまっている。本発表は、こうした日本の英語力の国際的な低評価を起点とし、英語教育政策が掲げるグローバル人材育成等の国際化の目標と学校・大学におけるカリキュラムや授業実践との乖離を指摘する先行研究(Glasgow & Paller, 2016; Underwood & Glasgow, 2018)を踏まえて、日本の英語教育政策の制度的・構造的な課題を検討する。本発表では、教育政策借用 (policy borrowing) の枠組み (Phillips & Ochs, 2003; Tanaka, 2005) を採用し、国際的な英語力指標で一貫して高評価を得ているオランダを比較対象として取り上げる。両国の英語教育政策や大学における英語関連カリキュラム、学習者支援体制の比較分析を行い、英語力の国際的評価が高い国の英語教育制度から、日本の英語教育において借用・応用可能な要素を抽出し、その導入可能性を検討する。

#### 発表⑪

**Era of revolutionary digital transition/transformation in education - Dilemmas, challenges and implications for the future learning/teaching/assessing of Japanese as a scripted foreign language in Australia -**

HASEGAWA Hiroshi Curtin University

A variety of digital technologies permeate our current society and daily lives. Digital technology has become a particularly hot topic since AI entered (intrusively) our education contexts in 2023.

Learning/teaching/assessing platforms powered by digital devices have revolutionised a broad range of academic disciplines, allowing personalised and collaborative learning/teaching/assessing approaches, but, at the same time, enforcing challenges such as those linked to academic integrity and ethics and possible devaluation of critical thinking development. Japanese is one of the most attractive Asian languages for students to study in Australian education institutions. Several studies have focused on Japanese language education with AI/in digitally oriented environments, but not many have reflected on the voices of permanent or sessional teaching staff subjected to this digital transition/transformation era. Referring to the presenter's past research on learning/teaching/assessing Japanese as a scripted language in Australian higher education contexts, this presentation will introduce a thematic analysis of 625 students' recorded assessment presentations (over eight semesters from 2021-2024). The presentation will provide an opportunity for participants to share obstacles experienced by sessional staff in the process of assessing tasks and to consider some implications for higher education settings in which integrative technologies are embedded.

## 研究発表・午後の部 [232 教室]

### 発表⑫

思考スペースと探究過程における情報量・協働性の関係-「国際情報分析」による探究学習を事例とした比較研究-

江寄 那留穂 愛知淑徳大学

吉田 夏帆 兵庫教育大学

関谷 祐史 関西学院大学

坂本 萌歌 関西学院大学大学院 学生

関谷 実代 関西学院大学 学生

近年、高等学校では「総合的な探究の時間」が導入され、また GIGA スクール構想下にて ICT 活用が推奨されているものの、それが必ずしも協働的な学びに繋がっていないとの指摘がある。本研究では、大学生や高校生を対象に有効性が実証されてきた「国際情報分析」の手法を用い、探究過程における思考スペースの違いが学習者の情報量及び協働性に与える影響を検討した。対象者をどこでもシートによる共有シート群とスプレッドシート群の2群に分け、同一条件下で国際情報分析を実施し、探究過程における情報量や情報共有のしやすさ、グループワークの協働状況や議論の活性度を比較分析した。その結果、スプレッドシート群は情報量の増加に優れる一方、共有シート群では対話の発生頻度やグループワークの活性度が高い傾向が確認された。以上より、探究過程においては、思考を空間的に共有できる思考スペースの設計が協働的探究を支える重要な要因であることが示唆された。なお、本

発表は「国際情報分析」手法を用いた探究学習における思考スペースの機能を多角的に検討する共同研究の一部である。

#### 発表⑬

思考スペースと探究成果の質・定着度の関係—「国際情報分析」による探究学習を事例とした比較研究—

關谷 武司 関西学院大学

芦田 明美 名古屋大学

安武 祥子 関西学院大学

清水 (辻) 彩 関西学院大学大学院 学生

近年導入された高等学校における「総合的な探究の時間」等では、ICT環境の整備が進む一方、探究成果の質やその内容の定着度に課題が残されている。本研究では、「国際情報分析」の手法を用いた探究学習において、学習者の探究成果の質及びその定着度に思考スペースの違いが与える影響を検討した。具体的には、対象者をどこでもシートによる共有シート群とスプレッドシート群に分け、国際情報分析の評価基準にもとづき探究成果を分析した。その結果、探究成果の質（論理性や多角的視点等）においては、共有シート群の方がやや優位な傾向が見られた。他方で、探究内容の定着度については今回の調査では両者に明確な差異は見られず、また、グループ間の差よりも個人差の方が大きいことが示唆された。以上より、探究成果の質には思考スペースが一定の影響を与え得る一方、その定着度は個人差の影響も考えられ、今後も継続的な検討が必要といえよう。なお、本発表は「国際情報分析」手法を用いた探究学習における思考スペースの機能を多角的に検討する共同研究の一部である。

### 研究発表・午後の部 [230 教室]

#### 発表⑭

環境文体論から見る英国ナショナル・トラストの環境観の変容—コーパスを用いた言説分析—

奥 聡一郎 関東学院大学

本発表は、環境文体論の枠組みを援用し、ナショナル・トラストを始めとするイギリスの文化財の情報発信のテキストを中心に環境に対する視点の変容を考察する。私たちを取り巻く自然や文化遺産に関連するテキストの文体分析は、環境に対する視点や態度を解明する上で重要である。本発表では、同団体の報告書や広報資料を対象にコーパス分析を行い、環境保護に関する語彙やコロケーションの通時的変化を調査した。分析の結果、初期の客観的

な「保存」重視の記述から、近年は持続可能性や人間との相互作用を強調する文体への移行が言語的に裏付けられた。これは、環境保護団体がいかに社会へメッセージを発信し、その役割を再定義してきたかの証左でもある。さらに、景観や文化遺産に関する言説の文体分析を通じ、環境に関わる異文化理解および環境文体論の学術的発展に寄与することを目指す。

## 発表⑮

二つの世界都市が語る〈自然〉：公園観光テキストの環境文体論的比較—東京とロンドンを事例として

寺西 雅之 兵庫県立大学

吉田 安曇 岡山大学

那須 雅子 岡山大学

本研究は、観光テキストにおける自然および文化の言語的構築を、環境文体論の理論枠組みに基づいて分析するものである。筆者らはこれまで、金閣寺、春日大社、姫路城、沖ノ島など日本各地の観光地を対象に分析を行ってきたが、本発表では分析領域を拡張し、都市空間における自然に焦点を当てる。具体的には、東京とロンドンの公園における観光言説（案内板、パンフレット、ウェブサイト等）を比較し、両都市が自然をどのように語り、価値づけているかを検討する。分析は Stibbe (2015) の「ストーリー」概念および Virdis (2022) の環境文体論的枠組みに依拠し、自然がどのような語りとして提示されているのかを明らかにする。また、Cronin (2017) の環境翻訳論および寺西・吉田 (2024) の翻訳比較手法を採用し、日英間で自然や文化が翻訳される過程における価値転換や文化的含意の変容にも着目する。都市の自然を対象とした観光テキストの比較を通して、言語表現が都市住民や観光者の環境意識・異文化理解の形成にどのように寄与しうるのかを考察し、持続可能な都市環境の言語的デザインに示唆を与えることを目的とする。

## ポスターセッション [236 教室] [対面+オンデマンド]

### ポスター①

新設科目「外国語学習アドバイジングの基礎」の実践報告—学生の経験的学びを概念的に捉える初期分析(M-GTA)—

森谷 浩士 岡山大学

近年の大学教育において、学習者主体の学びを支援する学習アドバイジングの重要性が高まっている。本新設科目は、受講生を「学生外国語学習アドバイザー(ピア・アドバイザー)」として育成することを目的として実施した。受講生がアドバイザーの役割を経験的に学ぶことで、自身の外国語学習観やコミュニケーション・スキルを向上させる可能性がある。本研究は、質的データに基づき、受講生がこの科目を通して、どのような変容プロセスを経たのか、その特徴を修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチにより初期的に分析・報告するものである。研究の対象となったのは、前述の授業の受講生(8人)で、8週間の授業期間中に課した3回の振り返りレポートを分析の対象とした。その結果、受講生の変容は4段階の経時的プロセスモデルとして概念的に捉えられた。本ポスター発表では、このプロセスモデルの詳細を、授業内容、今後の課題とともに報告する。

### ポスター②

世界遺産テキストに見るエコ・コミュニケーション—金剛桜にまつわる言説の日英比較を通して—

吉田 安曇 岡山大学

本発表は、世界遺産テキストにおけるエコ・コミュニケーションの特徴を、金剛桜(日光の社寺)に関する日本語原文と英語翻訳文の比較を通して考察するものである。エコ文体論の理論的枠組みに基づき、看板やウェブ資料に見られる言説の文体、物語性、価値付与等の在り方を分析した。その結果、日本語版では植物学的・生態学的特性を重視した客観的かつ簡潔な記述が用いられていた。一方、英語版では宗教的背景や人物の行為を中心とする物語的構成が見られ、自然が能動的主体として再構築されていることが明らかになった。これらの差異は、翻訳が文化的理解と感情的関与を促す媒介として機能していることを示唆している。さらに、本研究で得られた知見に基づいて、両言語による観光案内文の比較読解活動や環境保護の重要性を踏まえたライティングタスク等、実践的な教育的応用の可能性についても検討する。

### ポスター③

日本画家 勝田蕉琴のインド関連新出資料とその考察

五十嵐 潤美 岡山大学

日本人画家・勝田蕉琴はインドのラビンドラナート・タゴールに招かれ、1905年から1907年にかけてインドに滞在した。インドでの制作に関しては資料がなく、研究がなされていなかったが、近年、失われたと考えられていた絵画がインドで再発見され、研究が活気づいている。その作品は、日本画の技法と『ラーマーヤナ』の物語を融合させた、日本美術とインド美術の初期交流を結ぶ重要な一作となっている。この発見以降、他の作品や資料が次々と見いだされ、昨年は回顧展も開催された。これらを総合的に考察することで、謎だった蕉琴のインドでの活動を部分的にはあるが再構成することができるのである。

#### ポスター④

##### **Emotion regulation for adaptive classroom management in non-major EFL contexts**

菅野 雅代 仙台高等専門学校

Teaching English is fundamentally practice-based, requiring students to take an active role in their own learning. In English as a foreign language (EFL) classes for non-English majors, teachers often encounter student apathy, as many students view English as peripheral to their academic goals. Such challenges may discourage some teachers, whereas others strive to adapt their teaching. This presentation reports on research investigating how EFL teachers regulate their emotions to achieve adaptive classroom management. Semi-structured interviews were conducted with ten university EFL teachers who teach non-English-major students. The interview transcripts underwent a thematic analysis, combining inductive and deductive approaches to explore patterns related to emotion regulation. The results indicated that teachers used a range of emotion regulation strategies to adapt their attitudes and teaching practices to the realities of the classroom, suggesting their distinct ways of addressing educational challenges and upholding their well-being. These variations in emotion regulation strategies reflected differences in their perceptions of students and instructional goals. The findings suggest that EFL teachers should not only cognitively down-regulate their negative emotions but also view them objectively, recognising these experiences as constructive opportunities for creating an inclusive learning environment.

#### ポスター⑤

##### **Japanese Students' Engagement with a Social Learning Space: Awareness, Anxiety, and Participation at L-café**

Wang Jingzhou 岡山大学大学院 学生

Social learning spaces (SLS) are expected to foster out-of-class communication and intercultural

exchange, yet many show high awareness but low participation. This study examines Japanese undergraduates' engagement with L café, an informal drop-in SLS at a regional national university in western Japan. An anonymous online questionnaire (July–August 2025) was completed by 225 students (217 domestic Japanese). Although 93% had heard of L café, only 17% had visited, and most users attended only once or twice. Users mainly joined Free Talk, the Japanese Conversation Practice Program, and language-exercise sessions, using English, Japanese, or both. They reported benefits such as new friendships, deeper intercultural understanding, and increased speaking confidence, but enjoyment often coexisted with nervousness. Among non-users (n=171), the most common obstacles were an unclear atmosphere/rules, anxiety about going alone, and low confidence in foreign-language ability; some also worried whether Japanese use was acceptable, suggesting a perceived “English-only” norm. The findings highlight the need to move beyond visibility to legibility and psychological safety by clarifying activities and norms, creating low-risk entry pathways, and providing facilitator/buddy support to encourage broader participation.

ポスター⑥

**Bivariate Analysis of Factors Associated with Japanese High School Students' Choice of Humanities and Social Sciences or STEM fields**

内山 八郎 徳島大学

坂本 南美 同志社大学

井上 弘樹 新潟医療福祉大学

In Japan, people's perception of the distinction between bunkei (i.e., humanities and social sciences) and rikei (STEM subjects) appears to be more pronounced and dichotomous than that in countries such as the United States of America and England (Oki, 2019). In general, the binary division between bunkei and rikei appears to be more deeply embedded in many Japanese people's consciousness than in the latter countries. To understand the binary tendencies in the perception, this study examines the factors that are associated with students choosing either the humanities or the sciences as their area of focus. Several bivariate analyses are conducted to highlight associations between various independent variables and the choice between humanities or sciences. The results underscore that multiple independent variables are associated with respondents' choice of humanities or sciences, including grades as well as preferences for specific junior high school courses, and whether their parents focused on bunkei or rikei subjects. Moreover, the results indicate that grades and preferences for some subjects such as mathematics and physics are more strongly associated with the choice between humanities and sciences than others. To further understand the association requires more in-depth research.

ポスター⑦

## 薄田泣菫伝記漫画制作

池田 沙織 岡山県立大学大学院 学生

風早 由佳 岡山県立大学

倉敷市出身の薄田泣菫は、明治・大正期に詩人、随筆家、ジャーナリストとして数多くの作品を生み出し、特に明治39年の『白羊宮』では、新体詩（文語定型詩）を発展させた功績が高く評価されている。一方で、薄田泣菫に関する研究には未着手の部分が多く、明治詩壇に与えた影響を考える上で泣菫の生涯を理解することは重要である。以上のことを踏まえ、本研究は倉敷市の地域振興活動の一環として、詩人・薄田泣菫を題材とした伝記漫画の制作を目的とするものである。薄田泣菫文庫調査研究プロジェクトで翻刻された書簡、先行研究を調査し、専門家の助言を受けながら、研究成果を社会に還元する活動として伝記漫画を作成し、広く泣菫の功績を伝えることを目指す。また、本作品では、歴史的事実に加え、泣菫文学の魅力や泣菫の生まれ育った倉敷の風土への理解を促進する内容を取り込むこととする。

## ポスター⑧

西オーストラリア州立カーティン大学との国際交流活動の展開と成果—1993年度から2025年度までの教育・研究・学生交流—

大内 幹雄 福岡大学

市川 一夫 (公財) 姫路市文化国際交流財団

三島 健司 福岡大学

ZNAD Hussein カーティン大学

本研究では、発表者が所属した大学と西オーストラリア州立カーティン大学との国際交流活動について概観し、1993年度から2025年度までに実施された教育・研究交流および学生交流の成果を報告する。教育面では、カーティン大学教員を客員教員として招聘し、CLIL（内容言語統合型学習）を取り入れて実践した科学英語教育や、オンラインによる特別講義の取り組みを紹介する。学生交流では、英語研修・短期研修、交換留学に加え、さくらサイエンスプログラムおよびニューコロポプランを活用した短期日本研修プログラムの実施例を示す。さらに研究交流として、エネルギー転換および重要鉱物分野における日豪間ネットワークの構築と実践例を示し、今後のグローバル教育・国際交流活動の在り方について考察する。

## ポスター⑨

中学校における受動態の授業デザインの提案

中澤 花菜 宮城教育大学教職大学院 学生

本研究の目的は、中学生を対象とした受動態の授業デザインを提案することである。Granger(2013)は、受動態の指導において、能動態からの書き換えや言い換えといった形式の部分に指導の重点が置かれていたことを指摘している。また、藤本(2016)は受動態の形式面のみではなく、使用場面の指導の必要性も述べている。日向(2025)は、数量詞を含む文等で、書き換えにより意味内容が変化する例を挙げ、機械的な書き換え指導の注意点を指摘している。本研究では、現行教科書を分析し、以下の改善案を授業デザインに反映させる。まず、受動態の導入初期には書き換えを活用しつつ、早期に「受動態が優先される文脈」を提示する指導順序を提案する。さらに、書き換え自体を目的化せず、意味や機能の観点から態を選択する活動を導入する。教科書内の説明等の課題を明確にし、生徒が受動態の機能を正しく理解し、コミュニケーションにおいて適切に運用できる指導の在り方を検討する。

#### ポスター⑩

短期大学幼児教育科におけるキャリアデザイン授業の実践と考察—「キャリアデザインツリー」を活用して—

白井 智子 神戸大学  
大内 幹雄 福岡大学

本研究は、キャリアプランを具体的に可視化することを目的として開発された「キャリアデザインツリー」を活用し、短期大学幼児教育科の学生を対象に行った授業実践について報告するものである。「キャリアデザイン」の授業において、学生たちに、将来を「太陽」、現在を「木」、過去を「根」に見立て、自己分析を通して過去・現在・将来の自己像を一枚の絵として表現させた。幼児教育科の特性を踏まえ、マジックペンや色鉛筆、色紙、シール、イラスト等を用いた自由な表現活動を取り入れた。完成後には口頭発表を行い、学生相互による分析・評価を実施するとともに、アンケート調査により学習効果を検討した。その結果、自己理解の深化や将来のキャリアに対する意識の明確化が促されたことが示唆された。本発表では、授業実践の結果を基に、キャリア意識形成における本手法の有効性について考察する。

ポスターセッション[オンデマンド] ※ポスターは特設サイトをご覧ください。

#### ポスター⑪

インドネシアとのオンライン交流を通じた高校生の異文化意識の変容と英語学習動機の喚起 —「情意的成功体験」に着目した探究的対話の実践—

山口 智恵 兵庫県立吉川高等学校 / 兵庫教育大学大学院 学生

本研究の目的は、英語に苦手意識を持つ高校生を対象に、オンライン交流を通じた異文化意識の変容と英語学習の動機づけへの影響を明らかにすることである。兵庫県内の公立高校第3学年の生徒61名を対象に、株式会社 With the World と連携し、インドネシアの高校生と英語による日本文化紹介および対話活動を実施した。生徒はグループごとに探究したテーマ（アニメ・食文化等）を発表し、相互交流を行った。事後の自由記述をテキストマイニングおよび質的に分析した結果、「楽しさ」や相手の「傾聴姿勢」が生徒の心理的障壁を著しく低減させたことが確認された。特筆すべきは、実践的な英語使用における「困難さ」の認識と、意思疎通が成立した「成功体験」が併存し、その相乗効果が「もっと学びたい」という内発的な学習意欲を強く喚起した点である。本実践は、言語的障壁を乗り越える情意的なつながりが、学習動機形成に重要であることを示唆している。

#### ポスター⑫

非IB校における概念的理解を目指した文学授業の実践—『骰子の七の目』解釈を通じた批判的思考態度の変容—

中村 可奈子 兵庫教育大学大学院 学生

本研究は、国際バカロレア（IB）の「言語と文学」の枠組みを援用し、非IB校の公立高校3年生を対象に批判的思考態度の育成を目指した実践報告である。概念的理解と汎用的スキルを重視するIBの知見は日本の国語教育でも注目されているが、非IB校での実践例は依然として少ない。そこで本研究では「骰子の七の目」（恩田陸）を教材に、非IB校の文学国語の中でIBの要素を取り入れた授業を行った。具体的に取り入れた要素は、「対象への評価は受け手の見方で変化する」という探究テーマの設定、多角的な視点を体感させるプロパガンダポスター制作、文学批評に基づく解釈の論述による最終評価の3点である。この実践の結果、児童・生徒用一般的批判的思考態度尺度（CT-G）の得点において有意な向上が確認された。本発表では、創作活動と概念的探究を組み合わせた単元デザインの有効性について、生徒の変容データと共に報告する。

#### ポスター⑬

共修多読に関するナラティブ研究 — 日本人英語学習者と外国人日本語学習者の共働学習を通して

PAHEREDING Hanbaba 岡山大学大学院 学生

本研究は、日本人英語学習者が、外国人日本語学習者と共に行う「共修多読」を通して、英語使用意欲をどのように高めていくのかをナラティブ研究の手法により明らかにすることを目的とする。共修多読の一環として実施される多読活動後の対話（Book Talk）に参加した日本人学生を対象に、事前アンケートおよび半構造化インタビューを行い、回想法（ライブ

レビュー)を用いて個別の語りを分析する。さらに、活動を通じた多文化理解や交流関係の形成についても補助的に探究する。これにより、共修多読が学習者の言語使用意欲や国際協働学習としての意義にどのように寄与するかを示すことを目指す。

#### ポスター⑭

##### **Humanities Hold the Answers—オックスフォード大学シュワルツマン・センターの意義—**

那須 雅子 岡山大学

日本の大学をめぐる「理系重視」がしばしば語られる。しかし、科研費配分および大学入学者数に関する政府統計を見る限り、文系分野が急激に縮小し、理系分野が一方的に拡大しているとは言いがたい。一方、新聞記事データの分析からは、2000年代以降、「理系」が「必要」「不可欠」といった評価語と結びついて語られる傾向が強まっていることが分かる。こうした状況は、人文学が量的に縮小しているというよりも、大学内での役割や位置づけが相対的に周縁化されている可能性を示している。では、人文学はいまどのような役割を果たしうるのか。本発表では、このような知見を踏まえ、2025年10月に開設されたオックスフォード大学の Stephen A. Schwarzman Centre に注目する。同センターは、人文学を周縁化された分野とするのではなく、現代社会の課題や未来像を考える知として大学の中核に再配置しようとする拠点である。本事例を通じて、人文学の現代的意義を検討する。

#### ポスター⑮

##### **英語の丁寧表現に関する考察—人称代名詞と丁寧さ**

笠本 晃代 岡山県立大学

英語の人称代名詞は丁寧表現において重要な役割を担っているが、その使用の有無によって丁寧さがどのように変化するのかを分析することを目的とする。その際に、話し手と聞き手がどのような関係を持ち、事態をどう認知するのかを考慮に入れる。

特別講演 [230 教室] (ハイブリッド・ライブ配信)

**First Linguaging and First Knowledging and the Future of Indigenous Education: Perspectives from Australia, Mongolia, and Japan**

**Lecturer: Dr. Sender Dovchin** Curtin University

**Moderator: Dr. Nami Sakamoto** Doshisha University

First Nations peoples have sustained their cultural and linguistic practices for tens of thousands of years, developing sophisticated First knowledge of nature, land, water, sky, seasons, astronomy and navigation since the earliest moments of human existence. Although they may not have relied on modern technological instruments, they have long possessed intricate knowledge systems that continue to sustain their languages, cultures, communities, and ecosystems across generations. This profound practice of First Knowledging also brings forth an awareness of First Linguaging - the living and evolving expressions of First Languages that have existed since the dawn of humanity. Humans have always been linguaging; yet First Nations peoples have preserved a unique clarity and connection to this essence. For them, language is not merely a means of communication but an interwoven tapestry of spiritual expression, storytelling, and embodied systems of First Knowledges that nurture both cultural and ecological worlds.

This lecture explores the intersections of First Knowledging and First Linguaging among Indigenous communities in Australia and Mongolia, illuminating how linguistic and cultural continuity shape identity, learning, and belonging. By examining the dynamic interplay between Indigenous and dominant languages across homes, schools, and communities, it identifies pathways for embedding these epistemologies in curriculum design and classroom practice. Extending to Indigenous contexts in Japan, the lecture considers how First Linguaging and First Knowledging can inform transformative, inclusive, and culturally responsive approaches to Indigenous education for the future.

**Lecturer Profiles:**

Professor Sender Dovchin is Dean International, Faculty of Humanities, and Senior Principal Research Fellow at the School of Education, Curtin University, Australia. She is an internationally recognized scholar in applied linguistics, known for her research on translanguaging, migrant and Indigenous education, and language ideologies and identities. She has been named a Top Researcher in Language & Linguistics by The Australian Research Magazine (2021, 2024) and listed among the world's top 2% most-cited linguists (Stanford University list).

(日本語訳)

**First Languageing と First Knowledging、そして先住民教育の未来—オーストラリア・モンゴル・日本の視点から—**

講師：セnder・ドヴチン教授 カーティン大学

司会：坂本 南美 同志社大学

先住民族は、数万年にわたって豊かな文化的・言語的実践を継承し、自然・大地・水・天空・季節・天文学・航法に関する高度な First knowledge (先住の知) を発展させてきました。近代的な技術機器に依存せずとも、彼らは世代を超えて言語・文化・コミュニティ・生態系を支えてきた精緻な知の体系を保持しています。この深遠な First Knowledging (知を生み継ぐ実践) の営みはまた、人類の黎明期から続く First Languageing (言語を生きる実践) —すなわち生きて進化し続ける言語表現への気づき—を促します。人間は常に languageing (言語実践) してきましたが、先住民族はその本質への明晰なつながりを保ち続けてきました。彼らにとって言語とは、単なる伝達手段ではなく、精神的表現・物語・身体化された知の体系が織りなすタペストリーであり、文化的・生態的世界をともに育むものです。

本講演では、オーストラリアとモンゴルの先住民族コミュニティにおける First Knowledging (知を生み継ぐ実践) と First Languageing (言語を生きる実践) の交錯を考察し、言語的・文化的連続性がアイデンティティ、学び、帰属意識をどのように形成するかを探ります。また、家庭・学校・地域社会における先住民言語と支配的言語の動的な関係性を分析し、これらの知のあり方をカリキュラム設計や授業実践にどのように埋め込めるかを示します。さらに日本の先住民族教育の文脈にも視野を広げ、First Languageing (言語を生きる実践) と First Knowledging (知を生み継ぐ実践) の視点が、今後の変革的で包摂的、かつ文化的に響き合う教育のあり方にどのような示唆を与えるかを論じます。

**講師紹介：**

セnder・ドヴチン教授は、オーストラリアのカーティン大学人文学部国際担当学部長・教育学部上級主任研究員。応用言語学の分野で国際的に高い評価を受けており、トランスランゲージング、移民・先住民教育、言語イデオロギーやアイデンティティ研究で広く知られています。また、The Australian Research Magazine により 2021 年・2024 年の「言語学・言語研究分野トップリサーチャー」に選出され、スタンフォード大学の「世界上位 2% 引用研究者」にも選ばれています。